

脳卒中リハビリに「川平法」

慢性患者でも効果確認

角田病院

医療法人樹心会角田病院（佐波郡玉村町上新田675-4、角田紘二理事長☎0270-65-7171）はこのほど、脳卒中患者の新たなリハビリ法として注目されている「川平（かわひら）法」を導入した。考案者の川平和美氏がセンター長を務める鹿児島大学霧島リハビリテーションセンターで、スタッフが順次研修を受けて実施しているもので、発症後8年経った患者でも効果が表れているという。

（松本英子）



利き手の右手を回復させたいと川平法を受ける男性



川平法は、脳の一部が破壊されても、他の部位が役割を代行する能力（可塑性）に着目したリハビリ法。治療者が患者のまひした手足を操作

して、ピンポイントで繰り返し脳に刺激を伝えることで、必要な神経回路を再建・強化し、まひの回復を促進する。軽度、中度の患者に適するとい

リハビリ動作は指やひじ、肩など上肢・下肢ごとにパターンがあり、まひの程度に応じて選択し1日50〜100回行う。開発されたのは数年前だが、11年にNHKテレビ番組で紹介されると反響が広がり、角田病院でも患者からの要望が導入の直接のきっかけとなった。

リハビリスタッフ43人の中から希望者を選抜し、5月に2人、7月にも2人が

霧島センターで1週間の研修を受講。受講者は勤務終了後、他スタッフへの指導を行っており、26日には川平教授を病院に招へいして1日講習も実施した。9月にはさらに2人が霧島へ研修に行く。

現在、外来と入院を合わせ約50人の患者が川平法のリハビリを受けている。発症から8年経過した70代男性が、8年ぶりにまひした右腕で新聞を開けるようになったり、4年経過した60代女性が、80度しか上がらなかつた肩が130度上がるなどの成果が早速表われている。

リハビリテーション課の富田隆之係長は、「固まってしまつて適さない人も中にはいるが、効果がすぐ表われるので、続けようというモチベーションになる。川平法がここでできることを知ってほしい」と話している。

新潟県から治療に訪れた50代男性は、「インターネットで川平法を調べ、ここにたどりついたので生活がすべて不自由。せめて左手の補助ができるようになれば」と期待を込めていた。ただ、現在の保険制度